２０２１年度　校内研究

那覇市立
壺屋小学校

《目　次》

Ⅰ　研究主題
Ⅱ　主題設定の理由
Ⅲ　研究の全体構想図
Ⅳ　研究の考え方
Ⅴ　研究の手立て
Ⅵ　研究の進め方
Ⅶ　研究の組織
Ⅷ　研究計画
Ⅸ　報告書の作成

Ⅰ　研究主題

「運動に親しみ,楽しんで運動に取り組む児童の育成」

～協働的・対話的な体育授業・体育活動を通して～

Ⅱ　主題設定の理由

これからの時代を生きる子ども達にとって，生涯にわたって健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現することは，明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てるために重要である。そのためには，幼児期からの多様で適切な運動経験により，運動の楽しさや喜びを味わい，学習したことを実生活，実社会において生かし，運動の習慣化につなげることが大切である。運動することを通して，運動に対する興味や関心を高め，運動に関する「知識及び技能」，運動課題の発見・解決のための「思考力，判断力，表現力等」，主体的に学習に取り組む態度等の「学びに向かう力，人間性等」をバランスよく身に付けることが必要である。

新学習指導要領に示されている体育の改善点として挙げられているのが,「全ての児童が,楽しく，安心して運動に取り組むことができるようにし，その結果として体力の向上につながる指導等の在り方について改善を図る。その際，特に，運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について配慮する」である。

壺屋小学校の実態として、「体育が楽しいと答えている児童が９６％」「体育の授業でたくさん動いていると答えている児童が９８％」ということから、体育指定校としての取り組みの成果が出ていることがうかがえる。しかし減少しているとはいえ、まだ体育や体を動かすことにに対して苦手意識をもっている児童がいるのが現状である。例え，体育が好きな児童が９９％いても残りの１％の児童がそうでなければ，全ての児童にとって楽しい授業，楽しい活動とはいえない。児童の実態に応じて，常に，誰にでも楽しい体育，誰にでも楽しい運動を提案していかなければならない。そのために，体育における「学び合い」は不可欠である。お互いの関わりの中から，互いに助け合う協働的な体育を作り上げていくことが重要である。

また、沖縄県児童生徒の体力・運動能力調査報告書によると，体力と学力の相関関係について，小学校の男女の児童の体力と学力に関係する体力テストの項目は「シャトルラン」「５０ｍ走」「立ち幅跳び」という結果が出ている。壺屋小の新体力テストの結果では，A 判定の児童は〔H29〕１７％→〔R2〕３０％。E 判定になっている児童は〔H29〕１７％→〔R1〕３％と大幅に改善している。だが，以前として，男女ともに５０m 走・シャトルラン・立ち幅跳び・握力は全国平均よりも低い学年が多い。また，学年や個人での差も大きく，８種目のうちほとんどが平均に達しない学年もある。体力を高めるためには体育嫌いを減らすための授業改善と家庭を含めた身体活動の増強が必要だと言われ，体を動かすことを厭わない児童を育成する必要があるとされている。日々の学校生活において、子ども達に必要な体力を自然と楽しく高めていく体育授業・体育的活動の構築を行わなければいけない。

これらの実態を踏まえて，壺屋小学校では，全児童が体を動かすのは楽しい，体育の授業が楽しい，体育の授業が好きと感じる児童を育てていきたいと考えた。そして，運動をあまりしない児童・苦手な児童に，楽しさを味わわせることが大切だと考えた。

楽しさの中には「運動ができる楽しさ」「勝つ楽しさ」「運動の仕方が分かる楽しさ」「友達と関わる楽しさ」「運動するのを見たり応援したりする楽しさ」など様々なものがあり，これらを味わわせることで運動好きな児童を育てていきたい。

また，楽しさを味わわせる運動の仕方を「壺屋っ子体育」と称して、学びのスタイルの構築を目指す。そのために、児童同士の話し合いや友達の考えをもとに自分の考えを広げていくこと（協働的な学習）や友達，自分自身，教材，教具，教師，取り組む課題など様々な人やものと向き合い考えをもつこと（対話的な学習）を取り入れた学習を意図的に進めていけるような授業づくりを目指す。よって、研究主題を「運動に親しみ,楽しんで運動に取り組む児童の育成」とし、副主題を「協働的・対話的な体育授業・体育活動を通して」と設定した。

Ⅲ　研究の全体構想図

研究主題

「運動に親しみ，楽しんで運動に取り組む児童の育成」

～協働的・対話的な体育授業・体育活動を通して～

目指す児童像

体育授業や体育活動において，お互いに協力して学び合い，
運動に親しみ，楽しみ方を見付け，進んで運動する児童

【沖縄県の重点】
学力向上の取組の重点を「授業改善」におき日々の授業の充実を目指す。〈６つの方策〉
〇めざす授業像の共有
〇教材研究の充実他
【那覇市ふくぎじんぶなープラン】
【沖縄県問いサポ】

【壺屋小の実態】
・運動する，しないや好き，嫌いの２極化が大きい。
・近隣に運動する場がなく，下校後，体を動かす児童が少ない。
・話し合いをして学習する習慣が少しずつ身に付いている。
・持久力，投力が低い。

【教師の願い】
・体をたくさん動かして運動好きになってほしい。
・進んで運動を楽しむ姿勢を身に付けさせたい。
・体育の指導の仕方を学びたい。

研究仮説

教師が児童の実態を把握し，①発問の工夫，②場の設定・教材教具の工夫，③対話的な場面を意図的に学習過程の中に取り入れ，効果的に活用することで，児童が，体育授業や体育活動において，お互いに協力して学び合い，運動に親しみ，楽しみ方を見付け，進んで運動する児童が育つであろう。

手立て①「発問の工夫」

「教師は教えない・導く」というテーマをもとに発問の研究を行う。体育における発問には「児童にめあてをもたせるための発問」や「技能ポイントを知らせるための発問」などがある。沖縄県の出している「問いサポ」にも
〇学習のねらいに迫る計画的な発問
〇簡潔で焦点化された発問
〇「見方・考え方」を働かせる発問
〇学習過程や授業展開を意識した発問
などが掲載されており，様々な視点から発問の工夫を行うことで児童が主体的に学習に取り組み教科の特性を味わうことができるのではないと考えた。

手立て②「場の設定・教材の工夫」

児童に運動の楽しさを味わわせるために，場の設定や教材をどのように児童に提示していくかが大切である。これらを実態に合わせどう提示していくかを考えていけるようにしたい。児童の実態に合わせた場の設定。身に付けさせたい力を効果的に伸ばす教材開発。苦手な児童を救う場の設定・教材。

手立て③「対話的な場面の工夫」

教師の発問からどのような考えを児童がもち，それらをもとに目的をもって話し合っていけるのかを教師が考え，意図的に活動を設定する。児童が「教材」「課題」「自分自身」と向き合い，じっくり考える「個の対話」を充実させ，さらには「友達」や「教師」との「集団の対話」から様々な考えに触れ，自分の考えを広げていくための「交流の対話」との両面を意図的，計画的に取り組んでいきたい。

これら３つの手立てを、各学年で様々な単元を研究し，主題に迫りたい。

Ⅳ　研究の考え方

○研究主題について

今年度の研究主題は「運動に親しみ，楽しんで運動に取り組む児童の育成」に設定した。体育の授業において，すべての児童が体育の授業に楽しく主体的に取り組むことは究極の目的であるが，すべての児童が運動に親しみ，楽しんで運動することができれば，前述で述べた壷屋小の課題を解決するだけでなく，将来的に運動によりよく親しむ素地を育てることができるのではないかと考える。教師の立場においても，体育授業が苦手な教師が，児童と共に体育を楽しむことができる授業を構成する力を身につけることができれば，児童の実態に応じて楽しい授業構成を作り上げていくことができるであろう。これらの力を育むためには，「主体的，対話的で深い学び」を授業の中で取り組んでいくことが必要である。そこで，副主題を以下のように設定し，共通確認していきたい。

◯研究副主題について

今年度の副主題は「協働的・対話的な体育授業・体育活動を通して」に設定した。主題に示されている目的を達成するため，「教師は教えない、導く」ことをテーマに授業を行う。児童が主体的に協働・対話しながら思考・判断・表現する力を育てていく。今年度は各学年、様々な単元から主題に迫る。また，業間体育を活用した体育的活動からも主題に迫る。その際，新学習指導要領に示されている「協働的・対話的な学び」の観点から研究を進めることで，研究の内容を深めていく。

○目指す児童像について

体育授業や体育活動において，お互いに協力して学び合い，
運動に親しみ，楽しみ方を見付け，進んで運動する児童

目指す児童像をさらに身に付けさせたい３つの資質能力の視点をもとに考えると以下のようになる。

・**〔知識・技能〕**については，運動の特性を理解し，自分の体の動きに気づき，自分の力にあった技能を習得し発揮することができる児童を育てる。
・**〔思考力・判断力・表現力〕**については，それぞれの課題解決に向けて，ルールや作戦の工夫，技能習得のための工夫を行い，お互いに教え合いながら思考し，判断するとともに，他者に伝えることができる児童を育てる。
・**〔学びに向かう力・人間性等〕**については安全に気をつけ，主体的に体育の授業に取り組み，普段の生活の中でも楽しく運動ができる児童を育てる

○研究仮説について

教師が児童の実態を把握し，以下の手立てを意図的に学習過程の中に取り入れ，効果的に活用することで，児童が，体育授業や体育活動において，お互いに協力して学び合い，運動に親しみ，楽しみ方を見付け，進んで運動する児童が育つであろう。
①児童の活動を活発にする発問の工夫
②児童の活動を活発にする場の設定教材・教具の工夫
③児童の学び合いが深まる授業形態の工夫

研究仮説に示されている手立てを講じていく上で重要なことが「児童の実態把握」であると考える。アンケートなどを効果的に活用して全体の様子や児童個々の様子を把握することで，必要な手立てを講じていく。そして，各単元の運動の特性を生かす系統立てた授業スタイルの確立（**壷屋っ子体育スタイル**）を目指す。

Ⅴ　研究の手立て

①　「発問の工夫」

教師は、児童の技能を高めるために、技のポイントや方法などを直接教えることが多々あるが、児童に一方的に伝えるだけでは、児童の主体的な学びを促すことにはならない。そこで児童に技能や知識を教える発問ではなく「児童が主体的に学びを構築していくための発問」について研究を深めていきたい。問には様々な工夫が考えられ，児童にめあてをもたせるための発問（例：勝つためにどんな作戦ができるか？）や自己の課題を焦点化する発問（例：跳び箱で台上前転をするとき、どうやったら怖くないかな？）などを児童の実態に応じて考えていくことが重要であると考える。

沖縄県の出している「問いサポ」にも

〇学習のねらいに迫る計画的な発問　　〇簡潔で焦点化された発問

〇「見方・考え方」を働かせる発問　　〇学習過程や授業展開を意識した発問

などが掲載されており，体育の授業の中でどのような発問をしていくかを手立てとすることで，児童が明確に自分のめあてや課題をもつことにつながるのではないか。また，様々な視点から発問の工夫を行うことで児童が主体的に学習に取り組み，教科の特性を味わうことができるのではないかと考えた。

②「教材提示の工夫」

児童に運動の楽しさを味わわせるためには，どんな教材をどのように提示していくかが大切ではないかと考えた。これらを実態に合わせどう提示していくかを考えていけるようにしたい。ゲーム運動では、始めのルールを実態に合わせて工夫したり，チームの人数やコートの広さを試したりしながら提示の方法を考えていきたい。陸上運動や器械運動では、スモールステップで児童が課題をクリアしていく場の設定を工夫したい。

例えば・・・**４年生のソフトバレーボール**

サーブを打って終わってしまうからつまらないと感じている児童が多い。**（実態把握）**

↓

ラリーをする楽しさを味わわせたい。**（教師側の願い）**

↓

サーブがコートに入ったらキャッチは OK

サーブは打つのではなく，投げ入れる**（はじめのルールの工夫）**

③「対話的な場面の工夫」

単に話し合いの場面を設定するだけではなく,教師の発問からどのような考えを児童がもち，それらをもとに目的をもって話し合っていけるのかを教師が考え，意図的に活動を設定していく。

体育の場合，授業を進めていくと「勝ちたい」とか「できるようになりたい」といったことを自然に児童が感じる教科であると考える。児童の意欲を継続し，話し合い活動を通してさらに課題解決に向け主体的に活動してけるよう教師が工夫していく必要がある。昨年度までの研究の成果である児童が話し合いで学習を進めていくことができるということを生かし，さらに意図的に対話的な場面を設定していきたい。児童が「教材」「課題」「自分自身」と向き合い，じっくり考える「個の対話」を充実させ，さらには「友達」や「教師」から様々な考えに触れ，自分の考えを広げていくための「交流の対話」との両面を意図的，計画的に取り組んでいきたい。

〇今後の研究の計画（予定）

研究指定３年間

令和元年度　沖縄県教育委員会指定研究校　１年次

研究テーマの設定（理論研究，授業実践など）

令和２年度　沖縄県教育委員会指定研究校　２年次

研究テーマの追求（授業研究など）
令和３年度　沖縄県教育委員会指定研究校　３年次

テーマ「運動に親しみ，楽しんで運動に取り組む児童の育成」まとめ，発表

４月上旬	職員会議　→	研究について提案
５月	実態調査　→	壺屋小の実態把握
６月	理論研究	
７，８月	理論研修・実技研修	
９月～	授業研究開始	

Ⅵ　研究の進め方

１　研究方針

(1) 校内研究と学力推進の一体化を図る研究方法及び研究体制を確立する。
(2) 研究主題や研究内容について，全職員共通理解のもと，組織的に研究を進めていく。
(3) PDCA サイクルやカリキュラム・マネジメントに基づき，体育科の研究を推進する。
(4) 小中一貫教育の研究主題と校内研究との関わりについて共通確認する。
(5) 全職員が研究に関わり，協同して進めることで活性化，発展，深化を図る。
(6) 講師，助言者を招聘し，学習指導法の実際について学ぶ。
(7) 学習支援ボランティアと連携を図る。
(8) 授業の資質向上のため，各種研修会への積極的な参加を促す。
(9)「検証授業」や「授業研究会」等，情報提供の場を充実させ，互いの研究実践を共有化する。

２　研究内容

(1) 学習指導要領に沿う体育学習の在り方についての理論と実践の研究
(2) 隣学年部会を活用した，学習の系統性についての理論と実践の研究
(3) 学習意欲を高めるための学習環境の整備
(4) 全学年系統性をもった授業スタイルを確立するための研究
(5) 運動が苦手な児童も有用感・達成感の持てる授業展開の研究
(6) 運動の特性を生かし，児童の活動を活発にする教材・教具の研究
(7) 児童が主体的・対話的に学び合える授業展開の研究

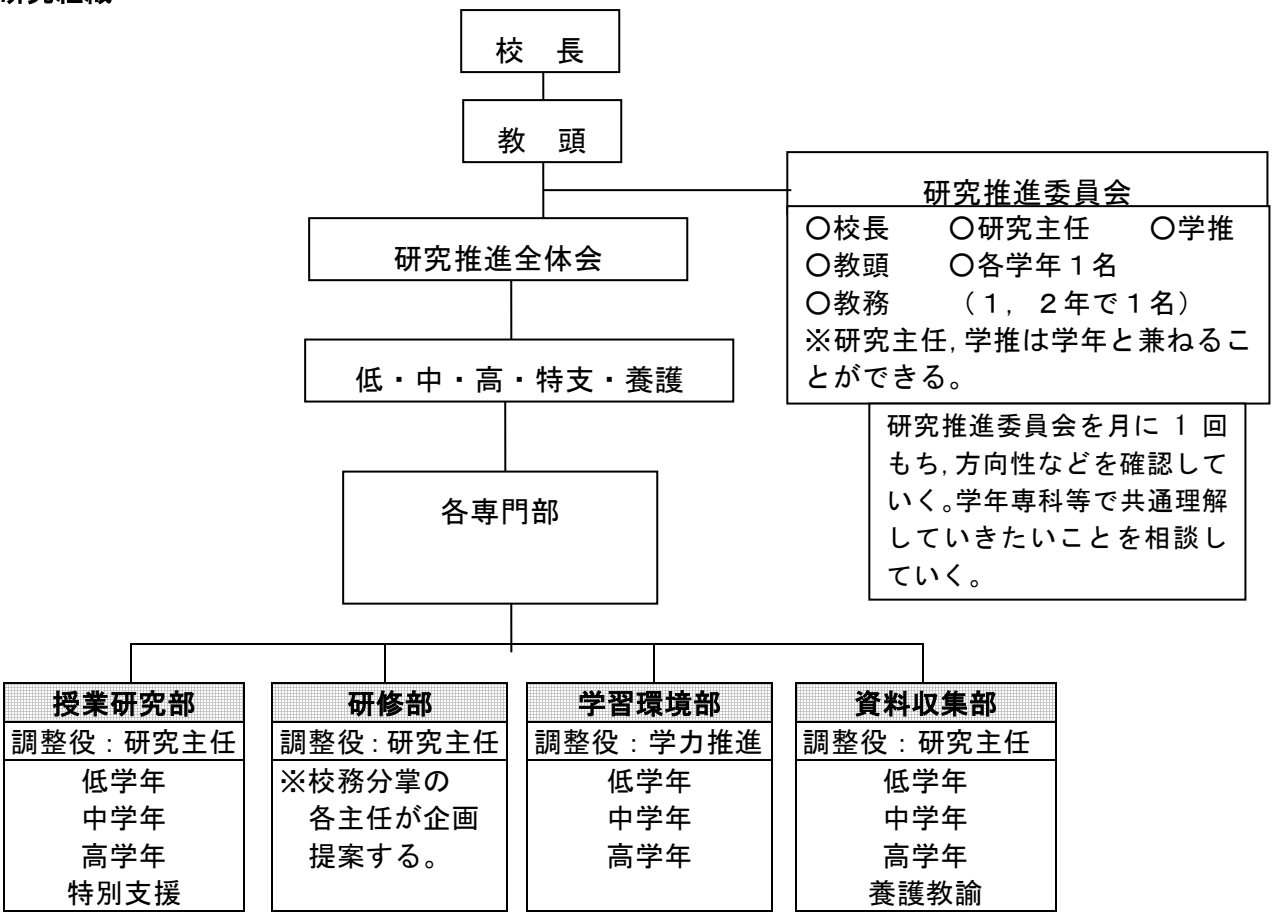
２　研究方法

(1) 毎月１回校内研究日を設け，必要に応じて適宜，研究会・学年会・各部会を実施する。
(2) 研究主題を受け，教師一人一人が日々の授業研究に努める。
(3) 全員が一人一授業（検証授業）を行い，授業改善に生かす。
(4) 主事招聘公開授業は，3 回実施する。全体授業研究会は，指導助言者を招聘し，理論及び実践を深める。
(5) 全体研究会では，司会・記録やその他の役割分担を輪番制で行う。
(6) 研究主任は，講師招聘による理論研究会の実施，研究の推進に関わる内容について吟味し，円滑的な研究会の運営ができるようにする。
(7) 低/中/高学年で隣学年同士が体育の研究を行い，情報交換し合う。
(8) 特別支援学級についても自立活動として研究授業を行う。（取り組み方は研究推進委員会とも相談しながら行っていく）

３　検証方法

(1)手立てが有効だったかを検証する。
(2) 手立てを行った結果どのような児童の変容が見られたか。アンケートまたは，カード，ノートへのふり返りなどをもとに検証を行う。
(3)事前，事後で児童の実態が分かるアンケートを実施する。

Ⅶ　研究組織



〇組織上の主な活動内容

校長		〇研究全体を統括し，指導助言を行う。講師，来賓への対応にあたる。
教頭		〇校長の補佐のもと，教員への指導助言を行いう。 指導主事・講師の依頼，公文の作成・発送を行う。
教務主任		〇研究会の日程調整を行い，研究会の表示や運営をサポートする。
研究主任		〇研究の計画，立案，運営，連絡調整，研究推進に関わる情報提供を行う。 〇実態調査の実施，集計，分析
研究推進委員会		〇研究推進についての企画・運営 〇学年部，専門部との連絡調整 〇理論研究，情報提供，研修会等の企画 〇指導案検討を行う
研究推進全体会（校内研究）		〇全職員で構成し，研究事項，実践上の諸問題を検討・協議し，共通理解を図り，研究を進める。
学年部 学年部		〇研究授業の内容検討，準備（隣学年） 〇日常の実践に関する情報交換 〇研究授業の記録，事前・事後の検討会の進行記録
専門部	**授業研究部**	〇授業の充実を図るための具体的な手立ての設定 〇めざす授業や子どもの姿の実現を図れたどうかについて協議を進める。 〇共通の視点をもって協議する。
	研修部	〇校内研究以外の研修（各担当主任が企画・運営・調整を行う）
	学習環境部（学力向上推進）	〇学習の効果をあげるための環境づくり（掲示物，体育カード）
	資料収集部	〇児童の実態把握（アンケート作成・実施，分析・考察）

Ⅷ　研究計画　　変更①　５／６　現在

月	日（曜日）	校内研究（内容）
４月	２６日（月）	校内研の進め方について
５月	２８日（金） ~~３１日（月）~~	先行公開授業（古堅　洋平）３学年　単元：表現運動「表現 or リズムダンス」 校内研修会　※評価についての内容を検討中
６月	１８日（金）	全体研究授業①３学年　単元：ゲーム「チュックボール」
７月	７日（水） １４日（水）	全体研究授業②４学年　単元：体つくり運動「多様な動きをつくる運動」 全体研究授業③６学年　単元：ボール運動「ベースボールゲーム」
８月		夏休み校内研修会　※３回程度開催予定
９月	１７日（金） ２９日（水）	全体研究授業④２学年　単元：表現リズム遊び「表現 or リズム遊び」 全体研究授業⑤５学年　単元：ボール運動「フラッグフットボール」
１０月		
１１月	１２日（金）	全体研究授業⑥１学年　単元：ゲーム「流れ星ゲーム」 研究報告書の作成
１２月		研究発表会に向けたプレゼン資料作成
１月	２８日（金）	指定研　全体公開授業　研究発表会 ４年２組　瑞慶山侑輝先生　単元：ゲーム「ディスクサッカー」 ６年２組　小松芳先生　単元：陸上運動「走り幅跳び」
２月		校内研　報告会
３月		

全体校内研の当日日程について

全体授業は基本、職員全員で参観します。研究授業を行うクラスは特別日課の６校時に授業を行います。それ以外のクラスは５校時終了後下校。１月の指定研発表を除くと７回予定しているので、学級によっては最大７時間の欠時が出てしまいます。しかし、低学年の場合は、時数が増加してしまうクラスが出てくる場合もあります。そこで、授業時間数については、管理職と相談し、別日で補ったり、短縮するなどの対応をお願いします。